

## 中国古文書による隋時代（601年）の天気\*

吉田一男\*\* 田中敬信\*\*\*

## 要旨

中国の古文書（大正新修大蔵経など）に残されている隋時代の天気に関する記録を解説・考察し、併せて現在の天気図との対応を試みた。その結果、13世紀も前の広大な中国大陸において当時の人々が奇異に感じて書き残した自然現象の観察の記録が、決して現実ばなれしたものではなかったことがわかった。

## 1. はじめに

中国古代に成立した儒教は、合理主義に立って倫理・政治の道を示したが、古代人の心はこれだけで満たされたものではない。そのために道教が土着信仰のなかから発生し、仏教も中国に流入した時は、巫祝・神仙・陰陽・神異等の方面のものとして受け取られ、理解された。このような傾向のなかにおいて、多くの仏典・語録等の記載の中には、神異・霊感的なものを多く含み、それが又自然現象的な色彩の強いものがみられる。今ここで取り上げた史料も、これら神異・靈感等の記載の中において、自然現象のごときものが多く記録されていて、その中に天気に関する記事が中国全土に亘って同一日時に十余ヶ所も見られるので、これを基に千数百年の昔の中国大陸における天気的一面を考察し得たらと思う。

## 2. その史料と背景

隋（581—617）の高祖文帝（541—604）は、寺院での誕生と伝えられ、さらに北周の武帝の廢仏（574）の後、中国を統一したために、多くの仏教治国策をなしたが、その最後のものが仁寿年間（601—604）における仏舍利塔建立事業である。この事柄に関する史料<sup>1)</sup>としては、広弘明集第十七、集神州三宝感通録上等がある。このなかで神異事項も多く一番まとまっているのが広弘明集第十七で、これを受けたと考えられるのが、集神州三宝感通録上である。

広弘明集第十七には、この仁寿の造塔の事柄のみが記されている。そのはじめに、仁寿元年六月十三日内史令豫章王暕によって宣せられた「隋国立舍利塔詔」があ

り、この詔文の次に、王劭の「舍利感應記」がある。詔文は、仏教学・歴史学上重要な事柄が記されており、舍利感應記には、この造塔にみられた神異・感應の記事がある。

## 3. その内容

王劭の舍利感應記には、仁寿元年起塔に関する各地からの表奏の記事がある。その内容は舍利塔を建立する前後の種々なる神異・靈感の感應記事である。これらを分類してみると次のように大別できる。

- a. 夢に関して……僧侶等のみた夢が造塔地の予言であった等。（4）
- b. 治病に関して……仏舍利を拝して不治の病が良くなった、死にかかっていた子供が生きかえった。（2）
- c. 動物に関して……仏舍利を迎えに鳥数千羽が集まり、それを廻り去った。兎が迎え走り出た。腹に文字のある神亀がみつかった。（3）
- d. 植物に関して……吉祥草、紫芝、靈芝、ひじりだけ等とよばれるものが発見された。これが発見されるときは吉祥生ずると信じられている。（2）
- e. 石函に関して……仏舍利を納入するための石を取り寄せてみると、人手を加えることなく石函になった等。（5）
- f. 神光に関して……仏舍利を安置してある所から光明が出て、その光明が他の所に移動してもどって来た等。（8）
- g. 瑞雲に関して……仏舍利をめぐる雲が発生し、その雲にはいろいろな色がついていて、妙なる調や音色を伝えた。（4）
- h. 天候に関して……天候に関係すると思われるもの。（17）

以上のようなものは、動物や植物に関してのものをは

\* Weather Distribution on 18th Nov. 601 A. D. Revealed by Ancient Manuscript of China.

\*\* K. Yoshida 気象庁予報部予報課

\*\*\* K. Tanaka 駒沢大学大学院 曹洞宗宗学研究所  
—1972年10月21日受理—

じめ、自然の現象と思われることが、現実の人間の行為と結びついて、神異・靈感として受け取られているように見える。

#### 4. 天候に関して

前述の、h、天候に関して、を考察してみると、

舍利感応記にある、各地からの表奏記事の一番最初に雍州於遊仙寺起塔として、

天時陰雪 舍利將下日便朗照 始入函雲復合 の一文がある。これは「天時に陰雪あり、舍利將に下らんとすれば、日便ち朗照なり、始めて函に入れば、雲復合す」(国訳一切経)<sup>2)</sup>としている。この所を集神州三宝感通録上では、次のように記してある。天降陰雪 舍利將下日光朗照 及入函雲合 これは、「天陰雪を降せるも、舍利將に下らんとするや、日の光朗らかに照らし、函に入るに及びて雲合じたり」(国訳一切経)とされて、舍利感応記とほとんど同じような表現を取っている。又国訳一切経の注では、この「陰雪」を、「曇れる暗き雪空なり……天気は大層悪かったが、との意」としている。

次に、舍利感応記では、華州於思覺寺起塔として、前述と同一に近い文章の終りに、

舍利下記雲霧復起 瑞雪飛散如天華 著人衣久之而不濕と記してある。これは、「舍利下り訖りて雲霧復た起り、瑞雪飛散すること天華の如し、人衣に著き之を久しくして湿さず」(国訳一切経)としている。降る雪を天から下る華にたとえて、その雪をめめたいしるしの雪と感じ、更に人や衣服に付いてなかなか溶けない様子まで書き示していることは、その時の気温と雪質までも想像させるほどの内容のもので、この舍利感応記が一方的荒唐無稽な神異事項の記事でうまっているものでないことを示している。

次に、呉州於大禹寺起塔の一文には、次のようにある。

天時陰晦 舍利將下日便朗照 始入函雲復合 これは「天時に陰晦なるに、舍利將に下らんとするや日便ち朗照す、始めて函に入るや雲復た合す」(国訳一切経)となっている。ここでは、先にあげた雍州於遊仙寺起塔の文と、雲→晦になっているだけである。このような違いの記事は、「陰雨」、「雲霧」等がある。他は前述の文と同一か、それに近い表現となっている。

以上のことを、山崎 宏博士の図表<sup>3)</sup>によってまとめると、次のようになる。

陰雪……8

陝西省 華州・雍州、甘肅省 秦州、河南省 相州・

汝州・嵩州、山東省 牟州、安徽省 亳州。

陰晦……5

湖北省 襄州、浙江省 呉州(越州)、江蘇省 蘇州、

四川省 益州、湖南省 衡州。

雲霧……2

山東省 泰州、山西省 并州。

沈陰……1

湖北省 隋州。

陰雨……1

陝西省 同州。

#### 5. 考察

舍利感応記・隋国立舍利塔詔の文中に、次の記事がある。

限十月十五日午時 同下入石函 これは、仏舍利塔の建立に関して、仁寿元年十月十五日正午をもって、全国一斉に仏舍利を下し石函に入れて起塔せよ。という意に解されている。この仁寿元年十月十五日正午を太陽暦にすると、西暦601年十一月十八日正午となる(東京天文台による)<sup>4)</sup>。この時に中国各地三十ヶ所に仏舍利塔を建立させた所、その表奏のうち仏舍利塔を建立するためにみられた神異・感応の文中に、その建立の日の天候に関するものが十七ヶ所より報告されている。

それでは前述した各地の天候に関して、それぞれの文字を解釈してみる。

陰雪……陰は空がくもっている様子、雪は文字通り雪の降っていることを示している。降るという動詞がなくとも、この時代では良いので、「空がくもって雪が降る」……雪

陰晦……陰はかげであり、おおわれている様子を示している。晦はくらい意味で両者より……曇

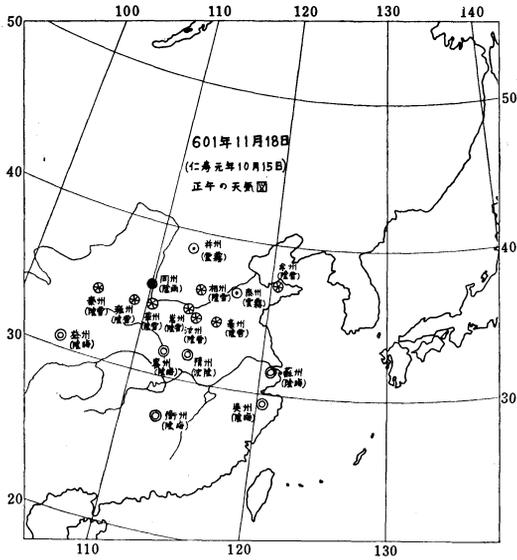
雲霧……雲もあり霧のわき上るさまを示している……霧

沈陰……沈は、物事の深い様子を示し、陰が雲のかさなり合いを意味しているので……曇

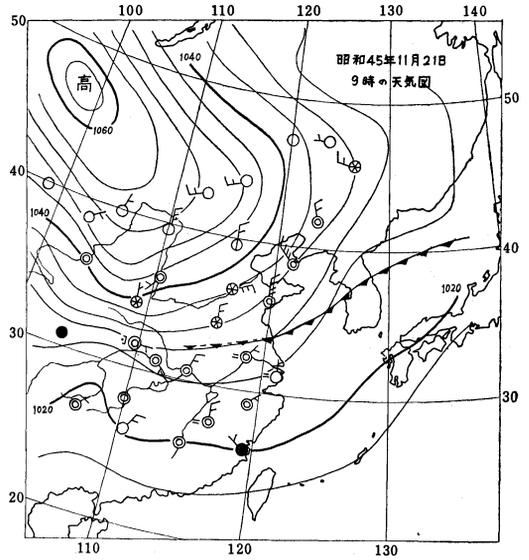
陰雨……空がくもっていて、雨の降る様子を示しているので……雨

#### 6. 当日の天気

以上の通り、601年11月18日正午における天気が中国各地で同時に観測されたことは非常に珍しいことであり、これは史上最古のものと思われるので、現在の地名と照合して天気図に記入してみたのが、第1図である。そこでこれと符合する日を現在の天気図から探してみたが、冬期にはこのような天気分布が多いが、良く類似しているものとして、昭和45年11月21日の天気図を第2図



第1図



第2図

に示した。この天気図を見るにバイカル湖方面に非常に発達した高気圧 1060 mb があり、広く中国東北区と華北を掩っており、華中には日本海から延びた不連続線の弱っているのがあると思われる。このようなときには華中から華北にかけて、雲が多く雪の降っているところがある。又、季節風が強いところがあり、雲の動きが早く、所々で日の射すような雲の隙間も出たものと思われる。

7. おわりに

広大な中国大陸における天候に関して、十三世紀も前の神異・靈感の記録から以上のようなことが考察出来た。このことから当時の人々には奇瑞にみえた自然現象が、荒唐無稽な記録や観察でなかったことが理解されたと思う。しかし、これによって奇瑞と感じた当時の人々の心が解けたわけではない。なお本稿の宗教的立場は、「道宣の神異観」（印度学仏教学研究第二十一巻第一号—日本印度学仏教学会1972. 12—）を参照されたい。更に中国の歴史の上では曆が重要な位置をしめ、自

然科学に関する研究も、その天文学的関連が日本においても多くなされている。しかし史料のなかには、多くの自然科学者の眼に接せられるべき必要のあるものが在していると考える。本稿がそのための一石となればと思う。

文 献

- 1) 大正新修大藏經
  - 50巻 統高僧伝 425-708
  - 52巻 広弘明集第十七 213-221
  - 集神州三宝感通録上 411-412
  - 弁正論 489-550
  - 53巻 法苑珠林 269-
- 2) 国訳一切経 和漢撰述部護教部
  - 2巻 広弘明集第十七 327-336
  - 5巻 集神州三宝感通録上 68-82
- 3) 山崎 宏 1942, 支那中世仏教の展開
  - 法藏館 331-336, 第四図
- 4) グレゴリー曆による